
「キツネの温泉」

rina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「キツネの温泉」

【Zコード】

N4024M

【作者名】

rinia

【あらすじ】

イギリスが日本の家に交友を深めるために遊びに行くと

「キツネの温泉」という一冊の絵本があり、その話がどことなく自分とアメリカに似ていると日本に言つと、この絵本に書かれている温泉は本当にあるといつ。そこでイギリスはアメリカをこの温泉に誘うのだが…

1・キツネの温泉（前書き）

この話に出てくる『キツネの温泉』は「タクミくらシリーズ」の小説に出てくる物語をもとにした話です。

1・キツネの温泉

「キツネの温泉」

むかしむかし、人里離れた山奥に、キツネの夫婦が住んでおりました。

ある日、巣穴の前に、生まれたばかりの人間の赤ん坊が捨てられていました。

キツネ夫婦は柔らかくておいしそうな赤ん坊を、久しぶりの「じちそ」と大いに喜び、

さつそく食べてしまおうとしましたが、赤ん坊が夫婦を見てあまりにも無邪気に笑うので、

食べるのはしばらく先にすることにしました。

コン、と名付けられた赤ん坊は、山の恵みを受けてすべすべと、素直に美しく成長いたしました。

いつものように、木の実を集め森の中を歩いていた娘は、山賊に襲われ大けがを負った

若者を見つけました。今にも息絶えそうな血まみれの若者を。コンは必死で抱え上げ、

キツネの両親が住む巣穴へと運んで行つたのです。

瀕死の重傷を負つた若者に、キツネの夫婦は暗く顔を見合わせましたが、コンは巣穴の近くに

こんこんと湧く温泉から湯を運び、懸若者の手当をしたのでした。

その温泉は血を止め、病を治し、空腹を抑え、心を癒す、それはそれは不思議な温泉なのでした。

コンの懸命な看病の甲斐もあつて、やがて若者は深く永い眠りから目を覚まし、

そして一旦でコンに恋をしたのでした。

すっかり元気を取り戻した若者は、自分は峠を北へふたつ超えた先の大きな差との、大きな庄屋の跡取り息子で、家人が心配しているであろうから一刻も早く帰らねばならない言を告げました。コンも連れて行きたいと申し上げた若者に、キツネの夫婦はどうしても首を縊には振りませんでした。

仕方なく、若者はひとり、山を去りました。

コンは若者恋しさに、日々泣き暮らしておりましたが、山を出る勇气はありませんでした。

人里へ下りたキツネがどんな目にあうか、知っていたからです。コンは、自分は両親とオナジキツネだと思っていたのです。コンの涙はとめどなく流れ、やがてどんどんと体がしぶんでき、ついには小さな花になってしまいました。キツネの夫婦はコンの花を、

北の里が見える山の斜面に移してあげました。

そしてコンはいつまでも、遠く若者を慕いながらひつそりと咲き続けたのでした。

おしまい

「…………」

「どうしたんです？イギリスさん。子供のみる絵本なんか手にひとつて

「あつ、いや、どんな話なんだろうって思つて…」

イギリスは日本との交友を深めるため日本の家に来ていた。そして沢山ある書庫内の日本特有のさまざまな本を見ていると、一つの絵本が目に入った。

それが今イギリスが手にしている『キツネの温泉』だった。

名前は『地方の昔話シリーズ』著者の名前が載っていない不思議な本だった。

それを真面目に読むとイギリスは何となく困ったような顔をしていた。

「…なんかこれ昔の俺とアメリカみたいな感じがしてさ。まあ、内容は全く違つんだけどな」

「そりなんですか…？？」

「ああ、俺最初にアメリカ見つけた時は、ただ国を手に入れたい。もつと大きくなりたい。

つていうそんな願望しかないただの欲のある奴だつたんだ。だけどあいつが俺の料理を…みんな

『マズイ』って言うのに初めて「おいしい」って言ってくれたのがアメリカで、俺がひとりで

居た時も支えになつてくれたのがいつもアメリカだつたんだ。だからずつと一緒にいてほしい。

他の奴らなんかに渡さないつていう感情が一気にこみあげて…反対にアメリカをずっと苦しめてた…」

「・・・・・・

日本にはイギリスにかける言葉が見つからなかつた。

イギリスはめつたに自分の過去のことを話さないので、何を言つていいか余計にわからない。

こういつときにはただ相手の話を聞いてあげるのが正しいのだと思つた。

「それでアメリカは独立したいつて急に言いだして俺は猛反対。そ

して戦争になつたんだ。

そん時はただのバカだつたんだ。あいつが苦しんでたことも何も考
えていなかつたんだから…

そして俺の周りの味方がみんなやられて一人で顔を見合せた時、初
めてアメリカの気持ちを知つた。

知ると余計に自分に腹正しくなつてアメリカに銃口向けたが、打て
るわけがない。

小さいころからずっと育ってきた俺の初めての弟だつたんだからな。

その時思つたんだ。こいつが幸せならいい。もつひとつを苦しませ
るのは嫌だつて。

だからこの戦争は降伏してアメリカは独立したんだ。
まあそのおかげであいつはもう立派な国になつたんだけどな。
わりい、急にこんな話して。けど、こんな温泉があるんだつたらも
つと早くに
癒されてもつとアメリカに優しくできたのにな……」

「大丈夫ですよ…イギリスさんもつらい過去を持つてているのですね。

もしかしたら中国さんもさう思つていたのかも知れませんね…」

日本は軽く下を向き苦笑いをした。

たぶん自分が中国のことを何も言わずにたたいて独立したことを思
い出したのだね。

「?なんかいつたか??」

「いえ、ただのひとつですよ…アーチャーさん、そのキツネの温

泉に出てくる温泉

本當にあるんですよ」

「せつ本当か！？」

田をぱぱりちりと開け、満面の笑顔になつているイギリスの田がとて
も輝いて見える。

「はー、やーの田の裏に『キッネの湯』とこつ温泉があるんですよ。
ですので、今度アメリカさんと言つてみてはどうでしょうか？
あつと心安らいで、沢山話すことができると思いますよ。」

日本は自分の部屋のふすまを開けたのは外の景色がとてもきれい
に見えた。

その景色の中心あたりにある大きな山を指差した。『のやぢやの山
の裏の少しのぼったところ』
その不思議な温泉はあるじこ。

「せうだな…今度誘つてみるかー！」

「はー。ここと思こまわぬ」

「うそ」

これで少しでもアメリカと田のよつて仲良くなれるのなら…
俺も過ちを少しでもやわらげてくれるなり…

…その後…

「なつなあアメリカ…べつ別にお前と行きたいわけじゃねーけど
明後日一緒に日本にあるなんでも願いが叶うつていう温泉にいかね
ーか? ?」

急にイギリスが腕を組み顔を少し赤らめて斜め上を向きながら
コーラを飲んでいたアメリカに言ひ、驚きで口に呑んでいたコーラ
を噴出した。

ガタッ

「別にいいけど…急に元びつしたんだい? ?」

アメリカはハンカチで口の周りを「じー」と拭いた。
その手はぱつちりあき、驚きを隠せないことがよくわかる。

「こついやーー俺はただ日本の絵本みて昔の俺らだなあつて思つて
そこで全部癒されいとか
そんなこと思つてたわけじゃなくて日本がー日本がそんなすうーい温
泉があるから
お前と行けつて言つたんだよーーー」

手をぶんぶんと振つてイギリスは余計に顔を赤らめた。
なぜかそれがアメリカにはとても面白かつた。

「・・・・・ふうん。まあいいや。君から誘つてくるなんて珍しい
からね。

それにそんなんすうーことひだつたひきつと朝の料理の下手をも浴ぬ
んじやないか? ?」

「サンキュー……つて！アメリカっ！！俺は別に下手なんかじゃねーぞ！！

「ああ。俺が独立して以来かな?」最近はみんなでいることが多いくなつたしね。

まあ明後田の温泉旅行楽しみにしてるよ。」「

「ああ。あつ俺これから上司のところに行かないと行けねーから！」
じゃー明後日

迎えに来るからな！！」

「ああ！」

こうして旅行に行けることになつたイギリスは、上司に呼ばれてる
と適当に嘘をついて
自分の家に戻つた。内心すごく嬉しくてもう早く準備して行きたか
つたのだ。

そして明後日を楽しみにしてイギリスはづつと妖精さんたちに温泉旅行の話を一日中していたのだった。

二日後

「んっ？？」

イギリスがアメリカの「うちに行こう」としたら急に電話がかかってきた。

「はいもしもし、」あらはイギ……」

「「めんイギリス！ 今日温泉に行けなくなっちゃったんだよ！……！
急に今日に限って緊急会議することになっちゃったんだ！ 大量に輸
出物を入れた船が
転覆して物が全部海の底に沈んじゃったんだよ！ だからその対処に
ついて早く会議を開かないと
いけなくなつて……君からの誘いだつたのに「ゴメンよ……！」

イギリスは途中から何も聞こえてなくて、ただ茫然としていた。
アメリカが来ない？ 約束を破つた？？ 今までそんなことあいつは絶
対にしなかつたのに……

「……わかつた……もういい」

「ちよつまつ……！」

ガチャッ

アメリカの言葉を聞くまでもなくイギリスは電話を切つた

「……くそつ……バカアメリカ……あいつなんか知るか……もつひとり
で行つてやる……！」

すると急いで家を出て日本へと向かつた。

「イギリス……きつと怒つてゐるよな……けど……俺のせいなんかじゃない

んだぞ！！

転覆した船が悪いんだぞ…………… ついでに歩くのも遅いんだよな
……………

アメリカは少し肩を下げて会議室へととまどま歩いて行つた。

日本

「えつと……確かにこの山の道を歩いてけば湯気が出でるからそれでわ
かるんだよな……」

イギリスは風呂道具を詰めたリュックを持って少し急な道なりを登
つて行つた。

「ハアハア、結構…きついな……あの若者つてやつはけがをしながら
らこんなところまで来たのかよ……」

イギリスは息を切らして少し限界に近付いていた。それほどまでに
きついのだ。

しかしどの歩いてると、田の前に湯気が黙々と見えた。

「温泉だー！」

イギリスは最後の力を振り絞つて走り温泉にたどりついた。
すると、温泉の中にはひとりの老人が入つていた。

「つあつ……」

「おお、これは外人さん、どうです？」この湯はとても気持ちいい

ですよ

「ああ……はー」

おじいさんに言われるがままイギリスは服を脱ぎ石の上に置くと湯につかた。

「ああ気持ちいい、山のぼった後の温泉はこんなに気持ちいいんだな」

「もうですね。私の10代から来てこますが」他の温泉は他のビリよりも気持ちいいです

「そんな昔から来てるのか?」

「はー。100年前に会った女の子に会いたいなと毎つひずつと来てたんですね」

「女の子?」

「ええ私がひどい病を負つたときずっと看病してくれたんですよ。

それはとても綺麗な子で、一日で好きになりました。連れて帰らつてしましましたがその子はキッズの親に育てられた身で、

こつこつに来ることはできなかつたんですね……」

それつて……もしかして……

イギリスは温泉から急に上がるところから絵本うつしものを取り出した。

「もしかしてこの話か！？？」

イギリスが手にしていたのは日本に借りた『キツネの温泉』だった

「？なんですかそれは？？」

「読んでみてくれ！－あなたが言つてゐるのとの話は重なるんだ！」

イギリスは絵本を差し出し、老人に読ませた。すると老人の目から涙がぽろぽろと流れ始めた。

「これは私ですよ。なんて偶然、私とコンのことをずっと見ていたかのような絵本ですよ」

老人は涙を脱ぐつてその絵本を優しい笑みで見ていた。
日本ならきっと許してくれるよな…

「その絵本あげようか？？それはきっとこの老人が持つていた方がいいと思うからな」

「くれるのですか…ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。」

外人さんはこんなに優しいお方だとは思つていませんでした

老人は本当に嬉しそうで自分まで嬉しくなった。
感謝されるのはとても久しぶりだつたのだ

「もしかしたらあそこに咲いている一輪の花がコンなのかも知れませんね」

「えつ？」

老人が向いている先には北の方をずっと眺めているように咲いている一輪の綺麗な黄色の花があった。

「まさか…」

1・キツネの温泉（後書き）

もう一話で終わりますが、「続きも見てやってもいいけどなー」つて人は
みてくれると嬉しいです^_^

2・大切な人（前書き）

これで『キツネの温泉』は終了です。
この話は少し長いですが、みてくれると嬉しいです^_^

2・大切な人

「きつとねうだ！あそこに一輪だけ咲いてるのは不自然すぎる！
あれはきつとコンだ！その絵本は本当だつたんだよ！！」

イギリスは確信をもつたように力強く言った。

老人はさつきよりも大粒の涙を流し、その言葉を信じたように
コクコクとうなずき、風呂から出ると着替えその花の前まで行つた。

「… そうか… 君がコンだつたのか… 気づいてやれなくてごめんな。
今まで何十年もずっと見てくれたのだろう？ 私が結婚してもずっと
君のことを気にかけているから… だけでもう大丈夫じゃ。 こうして
君に話せた
だけで私は満足じやよ。だから君も安心してもう休んでもいいんじ
や。」

今まで御苦労さま。そしてありがとうな」

そう言い老人はコンの頭を優しくなでた。するとそれを受け止めた
かのようにな
コンの花はお辞儀をしたように下を向き、また上を向くと徐々に枯
れて行き、
細かくなつて消えていった。たぶん、きつと安心して天に昇つて行
つたのだろう。
老人とイギリスは空を眺めた。その時の空はとても青く澄んでいた
のだった。

「…………行つたんだな。コンの奴……」

「そうですね…あつちでは幸せに生きませしだす。そしていつか私が死んだとき
あつとコソを迎えに行きまくよ。ビルにてても見つけてあげまく」

「やうだな。あつとコソも喜ぶが、あつとあなたを待つてたんだからな…」

イギリストがにこやかに語つと老人はまたコクコクと頷くと荷物をまとめた。

「はー…………それじゃあ私はこれで、これ以上いたらばあさんのが心配しますので」

「あつ、やういえば結婚したとか語つてたな」

「はー、やはりずっとひとりで居るのは心細いもので、私がコソのことを忘れられず途方に暮れていた時、ばあさんがあつと励ましてくれてな、この人ならいいと思えたんじや。」

「やうなんですか…俺も小さこころかうつと一緒に今は喧嘩してるが大切な奴がいるんだ…」

「やうなんですか…喧嘩は早く仲直りした方がいいですよ。そのままにしておくと後で後悔しか残りませんからね」

「ああ…わかつてゐる。帰つたら仲直りしてみるや」

「やうですか。ならよかつた…では私は…いつかまたあなたにお会いすることがあつましたらその時はお願ひしますじや」

「ああ、またな！そのおばあさんにもよひへ言つといってくれないか？」

「はい」

そう言い残すと老人は一礼して山を下りて行った。

二人は名前も聞かないままだつた。きっとまた会えると信じているのだろう。

自分たちは小さなところに似てゐる。だからきっとまた会えるだろう…と。

イギリスは老人を見送つた後、今更になつて気づいた。温泉に入つていたことを忘れ、下半身にタオルを巻いていただけでお湯だつた水滴も風で水となりとても冷たい。イギリスはくしゃみをした。

「ヘックシュツ…ああ…」のままじや風邪ひくな。もう一回あつたまつてから入るか」

そしてまた入るうつとに上がろうとしていた時、林の中からものすごい勢いで何かが来る音が聞こえてきた。

「なつなんだ！？」

「イギリス！…！…いるかい！？」

「アメリカ！…！…なんでここにいるんだよ！来なつて言ってただる！…？」

林から抜けて出てきたのはアメリカだつた。

イギリスは驚いて少しきつい言葉を言った。内心ではとても喜んでいて、幻覚かと思いたくなるほどで、その嬉しさが日にまで来ていた。

「君ちゃんと俺の話を聞いてたのかい？俺は緊急会議が入つて、今日は“いけない”って言つたんだよ。そのあとに明日には行こうって言おうとしたら君は「もついい」って電話切つちゃうし、急いで終わらせて電話したら君は温泉に居ないつていうし、君温泉の場所もおしえてくれなかつたから日本に聞いたら山の中だつて言つし・・・・もう今日は散々だよ、君はちゃんと最後まで人の話を聞くつてことをした方がいいと思うよ？？」

「なつ……おつ俺はその……えつと……すまん……あのときはちょっと気が動転してたんだ……もつもういいだろ！……早く入るぞ！……一緒にな……」

イギリスは岩に座り、太ももなどにお湯をかけ慣らしてたら中に入った。湯が熱かつたのかイギリスの顔は赤くほてつていた。アメリカは「はあ……」とため息をつくと「わかつたよ」と言つて服に付いた木や葉を払いながら脱いで同じく温泉につかつた。

「ふ〜、全速力で山を登つた後だから凄い気持ちがいいなあ

「だろ？俺がここにぼつてきて入つた時も気持ち良くてさー、そしたらそこに老人がいて……」

それから一人はここで会つた話や緊急会議でのこと、最近の国面白話など普段は話さないことを沢山話し続けた。話しているうちにアメリカのスリキズなのが知らないうちに消えていたのだった。

「へえ～、そんなことがあったのかい。その老人も何十年も忘れられずにここに通つてくるなんてすごいね。俺はもし君がいなくなつてもそんなこと絶対に出来っこないよ」

「なつ……俺だつてお前がいなくなつても絶対やんね……！」

イギリスは目を白目にして立ち上がり手をこぶしにして叫んだ。

「嘘にきまつてゐじゃないか。君は嘘と本音の区別もつかないのかい？本当に『馬鹿』だなあ」

アメリカは『馬鹿』を強調をせるようにそこだけ大きな声で言つた。

「なつなんだとーー」の……

言いかけた後、アメリカが大きな声で言い、その声を扼んだ。

「けど……俺はたぶん君が本当にいなくなつてしまつたらその老人と同じ行動をするかもしれない。君は大嫌いだけど、俺を育てくれた人だからね。そんな君にいなくなられるのはちょっとね……」

「俺も……だ。さつきは思つてもないこと言つてすまない……俺もお前にいなくなられると困る。

お前はずつと育ててやつたのに急に『独立』して俺の元から去つて行つて前までは俺の隣からいなくなつたお前が大つ嫌いだつた。だけどそれは俺にも非があつて、独立に追い込んだのも俺だつてわか

つたんだ。俺だつてお前がいなくなつたら絶対に嫌だ！……

「イギリス…」

そのあとも本音を話し続けた。その時だけはいつもと違い二人ともお互いに本音を言い合っていた。

その時イギリスは日本の言った言葉を思いたしていた。

日本の言った『沢山話すことができる』て言うのは本音を言い合えるることも含めた言葉だったのかもしれないな…

「イギリス！君は絶対俺の前からいなくなつちゃだめなんだぞ！」

「お前もなー馬鹿メリカ！！」

「馬鹿は余計なんだぞ！アホギリス！…！」

「なんだと！このヤローーー…！」

バシャツ

イギリスがアメリカの顔面めがけてお湯をかけると「やつたな！…！」とアメリカも反撃。それが繰り返され逃げたり追いかけたりでその光景はまるで子供のころに戻つたようだ。そのあとも二人は滑つて溺れかけたりしながらも遊び続け、気がつけばもう夕時の6時になつていた。

人はひとりでは生きてはいけない。だからこそ人は群がりそこで支えあって生きているのだ。

あなたにもし本当に大切な人、守りたい人、守ってくれる人、そん

な人がいたら、その人を一番の支えにしてあなたの人生という道を歩みなさい

「こんなことを昔誰かが言った。たぶん今の俺の一番大切な奴はアメリカだ。

だからこそこいつがいなくなるのは絶対に嫌なんだ。俺がこいつを守らないとな…

イギリスはそんなことを思いながらアメリカを眺めていた。

「アメリカー、もう帰るぞーーー。これ以上遅くなると日本が心配しちまつ」

「つえ？ あつ！ ……もうこんな時間になつてたのかい！？」

「どうやら日が暮れていたことに気づいていなかつたらしい。お湯をイギリスにかけようと少し屈み腕を下ろし手にお湯を入れていたその体制からもう終わりというように温泉に肩までつかつた。

「日が落ちるのもわからないくらい遊びに集中してたのかよ…」

「だつてさ、君と遊ぶことなんて独立して以来なかつたろ？だから昔のことを思い出してたんだよ。まだ俺が“遊ぶ”ってことも知らないときに君が「遊び方を教えてやる」って言ってキヤツチボールを初めて教えてくれたこと。結局最後は俺の方が投げるの早くて君は顔面にボール直撃で2日間入院したんだよね。いやあ俺、あの時は人が死ぬつてことも知らなかつたのに涙が出てきてなんだらうつてずつと思つてたんだよ」

「あれは子供だったから少し油断したんだよ……まあ心配させたのは悪いと思うけどさ……泣いたってことは、心の奥で俺が死ぬのは嫌だって感じたんだろう。国とは言え、人間でもあるからな。俺らは……」

「そうだね……もう上がりうつか……」

「そうだな」

二人は立ち上がり、服を着替えた。

アメリカは一応準備してきたものに着替えも入っていたので、木や葉や土などで汚くなつた服は着ずにすみ、イギリスも着て来たのと違つ服を着た。

「イリの温泉、本当にいい温泉だつたね。また来よつよイギリス！……」

「……ああ、でも次は絶対一人で来るぞ。緊急会議が急に来てもちゃんと待つてやるしあ前も待つてろよ」

「わかつてゐよそんなことくらい」

「ははつ、そうだな」

そんな他愛のない話をしながら一人はイギリスが来た道を帰つて行つた。

この温泉は血を止め、病を治し、空腹を抑え、心を癒す、不思議な温泉。

これは本当のことだつたのだ。イギリスとアメリカはそれを実感していた。

イギリスはこの温泉に入ったことでアメリカと和解し、より絆が深まり心癒され、

アメリカは傷を治しイギリスと一緒に心も癒された。

きっとこの温泉は神様がくれた人が生きていくためにくれたほんの少しの贈り物。

俺らに大切な人を大事にすることを教えてくれた思いの詰まった温泉。

だけどまた俺らは喧嘩を繰り返すだろう…だけどまたちゃんと仲直りして、

相手をちゃんと大切に見守つていこう…

俺はアメリカがいたからひとりじゃなかつた…さびしくはなかつた…

アメリカは俺がいたからここまで大きく成長できただ…

だつたらこれからも支えあって生きていこう…

君は俺にひとりじゃないことを教えてくれた大切な人だから…

2・大切な人（後書き）

ここまでこんな味噌つかずの小説見ていただき
ありがとうございました^_^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4024m/>

「キツネの温泉」

2010年10月10日15時21分発行